

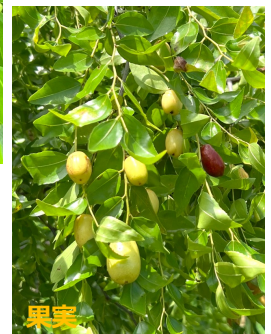
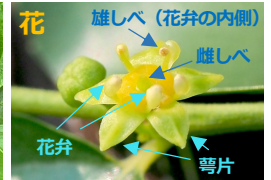
**Vol. 43に寄せて**

6月に入り雨の日が多くなってきました。この時期はアジサイ類が特に綺麗だと感じます。学内にはアジサイが多く植えられておりますが、六甲山は酸性土壌のため「六甲ブルー」と言われる鮮やかな青色のアジサイが多く見られます。また、シーボルトによって紹介されたものの実際には発見されず、一時「幻のアジサイ」と言われ話題となった「シチダンカ」というアジサイがあります。八重咲きのアジサイで、花びらに見える萼片が剣状に尖り、それが重なって星状に見えとても綺麗です。シチダンカも学内に多く植えられています。学内を移動の際には、是非ご覧ください。 (植物園のシチダンカー)



**6月に見頃を迎える植物：ナツメ (クロウメモドキ科)**

和名：ナツメ  
 学名：Ziziphus jujuba Miller  
 var. *inermis* Rehder  
 薬用部：果実  
 生薬名：タイソウ (大棗)  
 用途：健胃、強壯、精神安定、緩和  
 栽培場所：植物園 1号園  
 開花時期：6月



**ナツメについて**

ナツメは、ヨーロッパ南部・アジア西南部が原産と言われ、中国では古くから栽培されており、日本には奈良時代頃に中国から渡来したとされる落葉性の小高木である。葉は互生し、卵形～長卵形で長さは2~4cmである。原種の植物はトゲが多くあるが、本種はトゲが少なく托葉のあたりに時々観察される程度で、変種名の“*inermis*”は、トゲがない種を意味している。初夏、黄緑色で径が約5mmの小さい花が葉腋につく。花は、先の尖った大きめの萼片と、サジ状の花弁を5枚ずつ持つ。果実は長さ2~3cmの長楕円形をした核果で、秋に紅熟する。一般に、中国産は、果肉が厚く、種子が小さく、味は甘く酸味が少ないが、日本産のものは果肉が薄く、甘味がやや弱くわずかに酸味があるとのことである。

**大棗について**

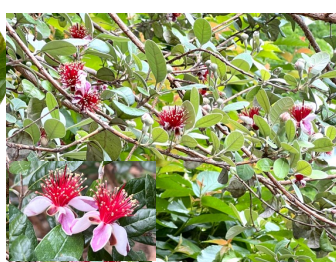
日本薬局方収載の生薬で、神農本草経では上品に分類される。秋に紅熟した果実を採取し、軽く湯通し乾燥して調製する。虫害を受けやすく長期の保存は困難とされる。大棗は、シワが少なく、赤色で弾力があり、果肉が厚く甘いものが良品とされ、健胃、強壯、精神安定、緩和を目的に、葛根湯、甘麦大棗湯、小柴胡湯、補中益気湯など、一般用漢方294処方中90処方で高頻度に配合され、漢方の要薬の1つである。



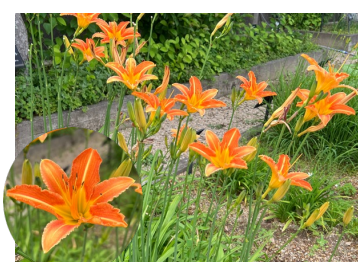
**6月に見頃を迎えるその他の植物 <科名はAPG分類体系による>**



カギカズラ (アカネ科)  
 生薬名：チョウトウコウ (釣藤鉤)  
 薬用部：トゲ  
 効能：血圧降下、鎮痙、鎮静



フェイスジョア (フトモモ科)  
 中南米が原産の果樹。収穫時期は秋で、果実はリンゴやパイナップルに似た甘酸っぱい味がある。



ノカンゾウ (ツルボラン科)  
 生薬名：キンシンサイ (金針菜)  
 薬用部：蕾 (根や葉も使います)  
 効能：解熱



アジサイ (アジサイ科)  
 生薬名：シヨウウカ (紫陽花)  
 薬用部：花  
 効能：解熱など



ウツボグサ (シソ科)  
 生薬名：カゴソウ (夏枯草)  
 薬用部：花穂  
 効能：利尿、消炎



キョウオウ (ショウガ科)  
 生薬名：キョウオウ (姜黄)  
 薬用部：根茎  
 効能：利胆、健胃



ペニバナ (キク科)  
 生薬名：コウカ (紅花)  
 薬用部：花  
 効能：通経、駆瘀血

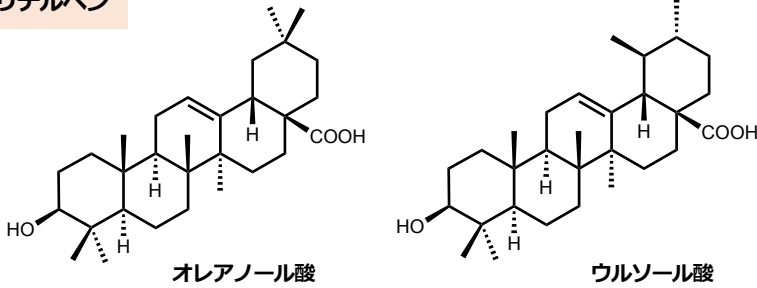


ナンテン (メギ科)  
 生薬名：ナンテンジツ (南天実)  
 薬用部：成熟果実 効能：鎮咳、消炎

大棗の成分と効能

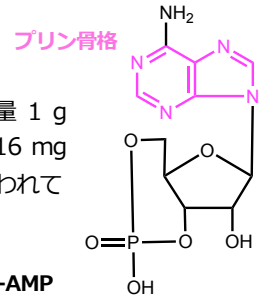
大棗は甘酸っぱいフルーツとしても食されており、糖（フルクトース、グルコースなど）や有機酸（リンゴ酸、クエン酸など）を多く含む。これら以外の成分として、トリテルペンのオレアノール酸やウルソール酸、ダンマラン型トリテルペンサポニンのジジフスサポニン類、中性多糖類のジジフスアラビナンが含まれている。また、プリン誘導体の1つであり、各種ホルモンや神経伝達物質が生理作用を示す際のセカンドメッセンジャーとして重要な役割を果たすサイクリック-AMP（アデノシンリン酸）を高濃度に含むことが報告されている。

トリテルペン

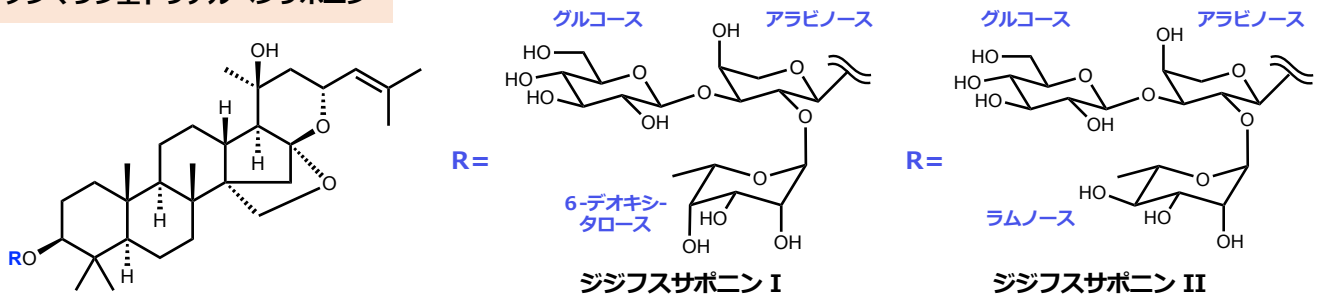


プリン誘導体

大棗には、乾燥重量 1 g あたり、0.03~0.16 mg 含まれているといわれている。



ダンマラン型トリテルペンサポニン



大棗のアルコールエキスには、抗アレルギー、抗潰瘍作用などが認められている。また、ジジフスサポニンには神経線維の成長促進作用、ジジフスアラビナンには抗補体作用、オレアノール酸およびウルソール酸には抗うつ病原菌作用が報告されている。

大棗は、多くの漢方薬に配合されているが、大棗が主薬と思われる処方ほとんどない。大棗の薬味は「甘」で、急な緊張を緩和（緩和）、体力や気力を補う作用を持つことから、これらの効能を期待して、カゼ薬、健胃消化薬、精神神経用薬など多くの処方に配合されていると考えられる。また、生姜と組み合わせることも多く、それにより副作用の緩和などが期待できる。

ナツメの葉の不思議

ナツメの葉には甘みを感じなくさせる成分ジジフィン（トリテルペンサポニンの1つ）が含まれている。ナツメの葉を噛んだ後に、砂糖を食べても甘味を感じないということだ。グラニュー糖で試してみると、まるで砂を食べているような不思議な体験ができる。これは、ジジフィンが舌の味蕾にある甘味受容体を選択的に阻害することで起こる。苦味など他の味覚に影響を与えることはなく、2~30分ほどで元に戻る。



MEMO : ナツメの由来

名前は、夏頃に芽吹くことから「夏芽：ナツメ」や、「夏梅：ナツウメ」からきている説がある。また、漢字で書くと「棗」と書くが、この字はトゲを表す「棘」と同じ意味で、原種のナツメにはトゲが多くある。一方、茶道具の1つ「ナツメ：棗」は、形がナツメの果実に似ていることから名付けられている。



MEMO : 果実の栄養

中国では、「1日3個のナツメを食べると老いが現れない」という諺があり、楊貴妃も好んで食べたといわれている。果実には葉酸や鉄分が多く含まれており、特に女性の健康に良いとされ、おやつとしておすすめである。

サンソウニン（酸棗仁）について

日本薬局方収載の生薬の中で、クロウメモドキ科植物を基原とする生薬に「サンソウニン」があるので紹介します。

基原：サネブトナツメ (*Z. jujuba* var. *spinisa*) の種子

特徴：ナツメと同属の植物で、変種名の "spinosa" は、トゲが多いことを表しており、多くのトゲを持ちます。果実はナツメより小さいですが、中の核は大きく、非常に酸っぱいのが特徴です。

効能：強壮、健胃、鎮静、精神安定を目的に、加味帰脾湯、酸棗仁湯などの漢方薬に配合されています。特に心因性の不眠や神経症、多汗、寝汗などに応用されています。



編集後記

学内には、日本薬局方に記載されているアマチャも多く植えられています。これもアジサイ科の植物で、名前から分かるように、その葉から甘みのある甘茶が作られます。生のアマチャの葉は甘くありませんが、発酵させることで甘みのある成分（フィロズルシン）が生成します。こちらも綺麗な花が咲きます。是非、ご覧ください。

神戸薬科大学 薬用植物園  
園長 土反伸和 (医薬細胞生物学研究室 教授)  
西山由美 (文責)、平野亜津沙、大井隆博  
E-mail : [nisiyama@kobepharm-u.ac.jp](mailto:nisiyama@kobepharm-u.ac.jp)  
総合教育研究センター支援部門 竹仲由希子

